

〔翻 訳〕

親密性のレジーム：モノそのものについて（上）*

ロラン・テヴノー
中原 隆幸，須田 文明 [共訳]

Laurent Thévenot, “Le régime de familiarité. Des choses en personne”, in *Genèses*, 17, Belin, 1994, pp.72-101

© Belin/Humensis, 1994.

I モノとのやりとり

（１）社会科学におけるモノの状態

社会科学が人間存在の間での関係の検討の中で発展してきたからといって、この科学においてモノの場所が承認されることを妨げはしなかった。そこには、ヒト・エージェントへのモノの関係を扱う際の多様なやり方に応じて、モノの複数の状態が見いだされる。特定の状態は、集合体についての学問に限られない。こうして道具の状態は、その機能性によって、構想の執行に資する行為手段としてのモノの扱いの長い伝統を延長させる。しかしながらこうしたモノの状態は、その拡張にもかかわらず、社会科学の種別的構築にとってかなり外在的なままに留まる。経済学では、技術的変化の分析の最近の動向に至るまで、市場的財の状態が学問の中心にあり、この学問はヒト・エージェントの間での関係のモデル化において、モノにかくも重要な位置を付与するのである。しかしながら機能的手段としての、もしくは商品としてのモノの承認は、モノの別の状態の承認に貢献して

きた運動の中で、久しい以前から疑問視されていた。「商品のフェティシズム」のマルクスの分析により影響された、また「消費社会」の問題視の中で広がった、信念のゲームの解明が使用価値や交換価値の外見を解体した。記号論が社会科学において獲得した地位は、その後、記号の状態でのモノのこうした扱いを補強することになる。こんにち、広告やマーケティング、特定のデザイン構想などが記号の状態に強く対応している。デュルケーム的発想の社会学で重要なモノは集合体の状態なのであり、デュルケームのタームによれば、「社会が、それ自身の経験によって、どのようにモノを思考するか」によって、モノはカテゴリー化されている。ウェーバーの理解社会学的方向と、エスノメソドロギーへの現象学の影響は、共通の意味作用と共通感覚の観点から集合体の要請を翻訳することを促した。社会構築主義の延長線上で、こんにち社会学で最も普及しているモノの状態は、信念の対象＝事物の状態であり、収斂的であると同時に創造的でもある期待のレポジトリである。

1) 政治的共同体へのモノの統合

こうした様々なモノの状態は、集合体やシテ（市民体）、社会、システムの構築がどのように検討されるかについて見いだされる。社会的なモノによって装備された社会集団、もしくは差異化された社会（パーソンズ）と並んで、公共空

* 本訳文は、Laurent Thévenot, “Le régime de familiarité. Des choses en personne” の全訳である。紙幅の都合により上・下の2回に分けて掲載する。

間がシステムの統合に対置される（ハーバーマス）。事物＝メディア記号もしくは事物＝技術、人間に固有なコミュニケーションへの障害物がこうしたシステム統合を促すのである。しかし事物はまた、アーレントによる「芸術」についての分析の中で、居住可能な世界の構成要素としてみることもできる。もしくはシモン・ドンの技術的アプローチによって、あるいはルロワ・グーランの人類学において、拡張された社会的結合の主要な要素として、さらには様々な形の共通善の構成のために格付けされる存在物として（Boltanski, Thevenot）、さらには、セールヤラトゥールが描く新しい形の政治的契約に関わるパートナー全体として、事物は見られることができるのである。

集合体と事物のこうした政治的合成が明らかにされ、告発され、あるいは称揚されようと、こうした合成は二つの問題を提起する。最初の問題は現実性の制約の地位に、より広範には、社会科学におけるリアリズムの問題に関わる。道具としてのモノの扱いが一般的に、ヒト・エージェントに内在的な主観性と、外在的現実性によりもたらされる客観性との間の根源的な切断を伴っているのに対して、モノの社会化は、主体によりもたらされる信念の収斂へと、現実性の試験を縮減する傾向にある。（何らかの現実性の試験の起源にある）表象の間でのこうした短絡は、ヒト・エージェントと環境との間の関係のダイナミズムを考慮することを妨げる。集合体の構成と、共通に同定された事物の構成との間の錯綜を考慮しながらも、いかにしてリアリズムの形態を維持するのであろうか¹⁾。現実性の調節の、したがって「帰還」の様式（当初は集合的ではないような）を探求しなければならないのではないか。このことは我々を現実性への依拠の様々な形態を区別するように促すであろう。

第二の問題は、パーソン（人）の扱いに関わる。上述のモノの状態は、人間存在を結合することに資するが、それは集合的統合と、パーソンそのものの扱いとの間の関係を検討すること

は可能とさせない。この問題がしばしば集合体と個人の対立に縮減されるのにたいして、合理的行為モデルにおける個人の把握は、パーソンそのものの扱いには全く対応しないのである。この個人は購買行動においてしかモノを把握しない。購買行動は共通に同定された商品への彼の私的所有権を保証する（他のあらゆる形態の領有を排除して）。パーソナリゼーションは選好（選択を指示する）の複数性へと縮減される。

ここで展開される研究方針は、モノの把握と、パーソンの把握にそれぞれ関わる、二つの検討を結合するよう提案する²⁾。規範や共通価値といった概念を通じて集合体の統合ないし解体を検討するよりも、もしくは技術的、メディア的事物により可能とされる連結ないし疎外を検討するよりも、むしろ我々は「パーソナリティとしての」パーソンの特定の扱いと、モノの親密な使用とを同時に検討しようとする。こうして我々は、活動のコーディネーションもしくは調節の様式の探求と、プラグマティックなレジームの複数性の同定のプログラムを追求するであろう³⁾。

2) モノの魂

このプログラムの大まかな方針を示す前に、我々はパーソンとモノとの近しさについての我々の研究に潜在する二つの研究方針を指摘しよう。最初の方針は、きわめてパーソナライズされたモノに関わり、エスノログがその途上で出会うモノである。また第二の方針は、パーソンとモノの錯綜に関わり、社会学者はこれを「実践」という概念によって理解している。近いことについてのこれらの二つのアプローチが、我々のアプローチの方向付けにとって、それぞれのやり方で、貴重である。

生命のない事物は魂を持っているのだろうか。事物の道具的扱いと、ヒト「エージェンシー」の絶対的特異性（それが宗教に根付いていようと、非宗教化されていようと）から考察されると、アニミズムは人間中心的な幻想を描いてきたし、これは人間と同様の扱いを無生物

へと拡張する。Levy-Bruhlによる解釈は、こうしたアニミズム的扱いを、人間の個人化の欠如へと結合させる。こうした混合は、中間項すなわち集合体への依拠によって説明される。このことは社会的事物の、集合的信念による社会学的扱いへと我々を導く。ここで我々の関心である二つの問題群の展望において、こうした読解は二重の限界を示している。すなわち、一つは信念へと向けられたアプローチに固有な限界であり、これはモノを脱物質化し、モノからその実際のコミットメントを捨象してしまう。さらに集合化の限界は、共通なることとパーソナルなこととの緊張を過小評価するのである。

最初の限界の批判は、象徴的なものという概念の広範な採用の批判と重なる。現地住民は宣教師によって偶像崇拜の罪を除去される。現地住民が自らの敬意を、物質的事物へと真に向けているのではなく、精神もしくは神性（事物はその一時的滞在の場所ではない）へと向けているのを、宣教師は見るのである。それと同様に Augé が観察するように、雨を降らせるための活動は、こうした目的を真に有しているのではなく、むしろ共同体原則もしくは本質的なモラルを再確認することであると、象徴人類学者は考えているのである⁴⁾。呪術的事物のこうした理解に対抗して、Augéは、こうした事物を、「電気エネルギーや原子力エネルギーでもあり得るような、操作可能な」⁵⁾事物として考察しようとする（操作者が、次々と起こる反応を必ずしも掌握することができないような、リスクや危険を冒すとしても）⁶⁾。

3) 「社会的実践」の両義性：モースの痰

我々の問題提起は実践活動についての、別の社会学的研究⁷⁾に突き当たる。Meadによって⁸⁾、またプラグマティズム哲学によって影響された社会学は、モノの動員と、身体場についての分析を提供するが、しかしおそらく、モースこそが、技術的道具への注目とならんで、「身体技法」に彼が与えた注目によって、実践についての研究をもっとも根底的に示し

た⁹⁾。

実際のところ、研究を進める中で、我々は二人のモースに出会う。その二重性は「身体技法」という概念によって隠されている。それぞれのモースは、単に異なっているだけでなく、今日、とりわけ極端な対立に体现される研究方針を生み出すことになる。最初のモースは、デュルケームの構成と適合的に、「社会的実践」を集合的行動として検討する。活動がどれほど具体的であると見なされようとも、それは集合体と対応することができ、社会的実践と制度とが合致する¹⁰⁾。実践についてのこうした概念が、長きにわたり、活動の社会学的、ないし民族学的な扱い（文化主義的アプローチと適合的な）を特徴付けることになる。この概念は、最も制度化された（その語の普通の意味での）実践を越えて、泳ぎ方や歩き方、食事作法を理解することを可能とさせる。

しかしながら、二人目のモースは、振るまいと、その自然環境（モノが居住し、装備を施された）との間の親密な調節を間近に追跡することに配慮する。こうしてモースは、戸外で、アフリカの人々が、足だけで、場合によっては杖を支えにして休憩のために突っ立っているのについて、こうしたサバンナでの姿勢は、見張り（牧畜）もしくは監視（見張り役）の活動の草の高さへの調節に由来する、と説明する¹¹⁾。逆に、振る舞いのこうした生態学的調節の重要性は、適切な振る舞いができなかったためにフランスのシャベルを使いこなせなかった英国軍隊に示されており、このために彼らは師団につき8,000のシャベルを買わなければならなかったのである。振るまいと事物、環境を含む調節のダイナミズムのこうしたアプローチは、Leroi-GourhanやHaudricourtの後の研究を導く。こうして、モースと次いでルロワ・グーランが行った、赤ん坊の寝かしつけ（揺り籠があったりなかったりする）や、赤ん坊の運搬の観察に引き続いて¹²⁾、Hauricourtは（両手を労働のために自由にさせておく）「受動的」運搬（腰や背中、もしくは袋や背負い籠での）と、「遅れた欧

州の人々」の「積極的」運搬（しかしながら乳母車の登場と普及が示しているような技術的進歩を促進した）とを関連づける¹³⁾。こうした進化的アプローチは事物の「系統」だけでなく¹⁴⁾、振る舞いと環境、事物との間での同時的進化を検討することを可能とさせる。

実践の二つのアプローチの間での緊張は、「パーソナルな観察」（モースが「身体の配慮の技術」について我々に示している）の中に集約される¹⁵⁾。痰の吐き方を知らない少女に出会って、彼は調査を実施し、Berryの村（彼の父親の出身地）では誰も痰を吐かないことを発見する。そこには、痰を吐く文化と痰を吐かない文化を対立させる実践についての文化主義的アプローチの中に完全に位置づけられる観察がある。しかし話はそこでは終わらない。というのもその子供が病気だからである。ところが、今度は、適応的な第二のアプローチを採用するモースが言うには、痰を吐くことは、風邪にうまく適応した反応なのである。こうしてモースはもはやこの実践を社会的礼儀作法としてではなく、（この場合、身体状態に）効率的な調整の結果として扱う。また進化が保証するのに十分でない調節を加速化させるべく、モースはこの少女に痰の吐き方を教えるのに没頭する。彼は、この子供に痰を吐くごとに4スーを与えるのである。彼女はこうして、自分用の自転車を手に入れようとして、小銭を貯め込む。

4) 実践の身体

ブルデューが、『実践論』¹⁶⁾において実践についてのこうした問題を取りあげるとき、彼は、ここで我々の関心を引く問題と近い問題を見ている。というのも彼は「疎遠な世界との親密化と、親密な世界からの根無し草化」について指摘しているからである（p.163）。彼は、自ら引用するマルクスの定式にしたがって「具体的な人間活動」（p.154）を探究し、意図を持った行為という理念主義的アプローチと対峙しようとする。彼はこれが、現象学と実存主義においてプロジェクト＝投企という形で復活させられて

いるとみている。とりわけ、彼のカピリア地方のエスノグラフィーの研究において、具体的行動へのこうした注目によって、彼がハビトゥスという自らの中心概念を鍛え上げたことは周知のことである。この概念は、モース自身がハビトゥスの中に認めたこうした「社会的性格」を含んでいる（「形而上学的習慣および神秘的な『記憶』」¹⁷⁾と対立した）。しかしこうした具体的行為への注目には身体化を含んでいる。これはメルロー＝ポンティにたいして、フッサールのタームでの「私は以下のように考える」よりも、「わたしはできる」により近い意識概念を構築することを可能とさせた。またこうした意識は、「物理的世界へと、投影＝投企され、身体を持つ。それは意識が文化的世界へと投影＝投企され、ハビトゥスを持つと同様である」。身体は我々のパーソナルな行為を「安定した性向」へと延長させる¹⁸⁾。しかしながらモースにおいて存在する身体技法のこうした二つの側面のうち、ブルデューは、ハビトゥスの集合的同調に配慮した最初の側面を優先する。今日ではそう呼ばれるのだろうが、「生態学的」な適応という第二の側面は、「客観的制約」の考慮においてしか登場しない。一般的で集合的な事物（この場合、構造であり得る）に言及するよりも、同じメルロー＝ポンティにしたがうことができる。彼が、（開かれた世界への居住とは無縁な）「事物一般」の唯名論的批判を延長することで指し示す方向において、彼にしたがうことができよう¹⁹⁾。この場合、意味は、「無限によって具体化を作り出す道具」²⁰⁾として考えられ、「器官の研究は、『感覚』という単語の新しい意味（を発見することを可能とさせる）」²¹⁾。同様にして、モースにより素描された実践ないし身体技法の第二のアプローチが有効であり得る。というのもそれは、身振りや事物、行動環境の同時的進化を考慮するからである。こうしてルロワ＝グーランがこうした展望に挿入されるのは、「社会的なるものの物質的なるものへの一体化」²²⁾を回避しようとして、「あたかも事物と日常的な身振りとが徐々に鑄造されるかのように、日

常的な形態が、無意識の緩慢な造形に服する」さいのやり方を彼が考慮するときである。

しかしそこでは、そのカテゴリが、個人的もしくは集合的な行為のカテゴリとは両立不可能であるような、システムのアプローチには直面していないのではなかろうか。社会的な取り決めのなかでの実践の集合的調節と、環境への行為実践の調節との間の緊張、モースとその弟子たちにおいて、以下のような対置により宙づりにされた緊張を、真面目に捉えるべきではなかろうか。すなわち「生物学的＝社会学的現象」というハイフン、「伝統的行為と効率的行為」の連結（モース）、もしくは「オペレーショナルな観点からの」、「生理学的、技術的、そして社会的な」「漸進的な三つの水準」（ルロワ＝ゲーラン）²³⁾の差異化である。

（２）人とモノとの間でのやりとりの様式についての調査

１）どのように環境を把握するかを規定するプラグマティックなレジーム

文化主義的アプローチと機能主義的アプローチとの間で決定的となった緊張は、今日、まず認知主義的研究と、生物学とのその両立可能性の探究とが提起する挑戦によって活気づけられている。一方の側に与するように選択する対決や勧告は、我々が導くアプローチには適切ではない。和解不可能な認識論的立場の間で選択するよりもむしろ、我々のプログラムは、モノや他の人間存在、他の人間ならざる生き物を含む環境との自らの調節を、人間存在が調整している様々なやり方を方法論的に探求することを目的としている²⁴⁾。コーディネーションのダイナミズムへの注意深いアプローチ²⁵⁾、および行為の評価と再調節が依拠している目印への注意深いアプローチが、現実性の帰還の様式と、集合的統合の姿を同時に解明することができる。

共通善の種別化をめぐる集合的統合は「正当化のレジーム」²⁶⁾に基づいており、公的討論の要請と直面する。こうした要請に真面目に応えるならば、レトリックに属する討論の様式と、

発言を支えるために召喚される証拠の形態との結合を示さなければならない。正当化の秩序についての調査は、こうして、証明するために事物が格付けされる様々なやり方を明らかにすることができ、これは、可能なこと *le probable* の多くの形態と対応しているのである。認定する *probatoires* 格付けがコーディネーションの堅固な枠組み付けを提供し、コモンへの事物の統合の様々な姿を描く。こうして上述の共通の事物の状態が見いだされる。それは学問的な *discipinaires* 枠組みに結合しているのではなく、コンヴェンション的な格付けの形態と関連づけられており、人々に対して、遠くから行動を調節し、判断の一般の形態に落ち着くことを可能とさせる。

こうした正当化のレジームは、（行為のフォーマットにおいてよりローカルになされている）行動のコーディネーションを集合的に統御する必要性に応える。行為のフォーマットは、存在様式と介入様式の二つのタイプの「エージェンシー（行為能力）」によって特徴付けられる。すなわち主体という意図をもったエージェンシーと、（意図の実行手段である）事物の機能的なそれである。正当化のレジームへの移行によって、（人とモノに公的に付与された能力に依拠することで）他者の意図についての不安を統御することができる。こうして意図についての訴求はこれらのコンヴェンション的な能力のおかげで停止することができる（権利として、この訴求はパーソナルな意図に照らして果てしなく続くとしても、そうとはならず）。こうした行為フォーマットの自然さ（しばしば事象の扱いの様々な様式の一つの様式としてフォーマットを見ることを妨げる）は、日常言語との合致に由来する²⁷⁾。行為理論（とりわけ分析哲学において発展してきたそれ）と、日常言語との間の相同性は、こうしたフォーマットにおいて人間活動を把握するように促す。しかしながら行為の意味論²⁸⁾が我々に対して、このフォーマットの種別性を区別するように助けてくれるのは、事象の扱いのカテゴリシステム

の強い意味での、「行為のボキャブラリ」を同定することを我々に可能とさせることによってである。

しかしながら行為の言語が際だっているからといって、別のレジーム（こうしたフォーマットを取らないかもしれないような）へと、とりわけ二つのタイプの「エージェンシー」の間のこうした差異化を被らないような、近しさのレジームへと考察を延長させることを妨げるべきではない。親密性へのこうした探求の最初の素描において我々が指摘しておいたように、このレジームは様々な感覚を通じて、モノとの接触を扱うことを想定している。こうした感覚が事物のフォーマットを通じることなしに、環境になじませることを可能とさせる——身体的なコミットメントにおける暗黙のうちの接触——。またこうした感覚は事物（とりわけ格付けされた事物）への準拠によるのではなく、客体化し得ない *infra-objectaux* 目印への準拠による調節を関与させる²⁹⁾。本稿で我々が着目するのは後者のレジームについてである。というのもそれはモノと人とをより密接に接近させる傾向にあるからである³⁰⁾。行為フォーマットから脱却するためには、活動の周囲環境の順応において、またその誤謬と修正において、つまるところ身振りと目印（行為タイプと機能的事物の同定されざるレベルに位置づけられる）において、活動の動きを追跡しなければならない。

2) 様々なレジームにアクセスするための調査様式

その様々な扱いにおいてモノを追跡することはデリケートな問題を提起する。すなわち調査と、人とモノのこれらの多様な状態の把握への調査装置の調節という問題である。

こうして物理主義的扱い（本稿では取り扱わない）は、日常言語では満足しない。それは、「本質的特性」によってモノを把握することを任務とする試験機関で使用されているような、測定のコンヴェンションと、特性抽出機械を必要とする³¹⁾。既述のように、日常言語は、行為フォー

マットへと調節されており、主体の意図を持った「エージェンシー」を浮き彫りにさせ、事物はこの意図の執行の機能的手段として捉えられている（それが、その道筋への障害物である場合には、機能不全的手段として）³²⁾。かくして主たるアクターの素描と関連した時間性のなかで、事象の報告を記述する報告書の形態として、語りやプロットが構築される。慣行的な呼び方を運ぶ技術的ジャーゴンとは異なり、日常言語は、モノの呼称と機能の定義との関係において、慎重に事物を区別する。

正当化のレジームもまた日常言語に基づいているが、逆に、証拠の公的産出を可能とするために、存在物のコンヴェンション的格付けの制約を満たさなければならない。親密ではない人、例えば職業的な調査員によって提示された質問は、匿名の第三者に向けられた論述を喚起させ、正当化のレジームに向かう傾向にある。それは、（社会学者によりしばしば、アドホックな合理化として考えられている）取り締まり部局の「調査」をもたらす。かくして行為の遂行へ向けられた質問は、機能的に調節された手段を関与させる型どおりの報告を収集するリスクがある。すなわち工業的効率性の基準にしたがった判断のために組織される一覧を収集するリスクがある。

「もし人々に、『棚の上にある何かを探すために、あなたは何を利用しますか』と尋ねたとしましょう。質問された人の90%は、脚立を利用すると答えます。これは妥当なように思われます。しかし実際には、我々自身にもよくあることなのですが、あなたは手近にあるイスを引っ張り出して、この上に上るのです」（国立試験研究機関のエンジニア、エンジニア1）。

ここには、機械による特性抽出と機能性評価に慣れた、試験研究機関のエンジニアが、事故のリスクを捉えるために、使用法へとその調査を延長しなければならないときに、彼が至る方法論的観察がある。

したがって国立試験研究機関のエンジニアたちは質問票による遠回りを回避することで、テ

Oct. 2018

親密性のレジーム

ストを使用法へと拡張させることを可能とさせる道具設定を構築してきたのである³³⁾。道具は人間とならんで、事物をテストし、あるいはむしろ、独立した把捉が可能な二つの実体へとは容易に切断することができない、使用者＝事物という対（つい）への共同コミットメントをテストするのである。こうした装置はハイブリッドである。私的な使用のシーンであるように家具が置かれ、設備されたマンションは、観察者がいるための小部屋を伴っている。彼らは二つのタイプのまなざしによって、展開しているシーンについて意見交換する。すなわち、見られることなく見ることで、暗室から「ライブの」見世物の観察を目的としたガラス板。また自在に録画することを可能とさせ、特性確定装置を補足する可動式ビデオカメラの対象。これこそ実験室の習性なのであり、つまり圧力鍋についていえば圧力、ガス供給量、高温度の把捉である。ライブの見世物は企業のクライアントに提供されており、こうした企業はそこに、記録されたビデオ録画をビューアーで見る場合よりも、いっそう大きな確信の源を見いだすのである。

観察装置は、人間存在がそこで思うがままにはしゃぎ回り、もしくはマウスのように刺激に反応するがままであるような家具付きの空間に依拠するだけにとどまらない。実験が事物の使用を観察することを目的としているいじょう、彼らの活動をこの方向へと向かわせなければならない。事物へと直接向かうようにという指示は、正当化のレジームを惹起し、また適切な道具の細心な使用へと仕向けるようなリスクがある。調査者が行為の仕方の可変性を管理するのが、日常言語を通じてなのであり、また事物のノーマルな機能性について注意を引くことなくなのである。試験機関のエンジニアたちは、間接的で、一般的な目的を提案する。指示は「あらすじ」の形を取り、アクターたちに対して、その目的に到達するために即興し、自らの行為の仕方を変更させるという裁量余地を与える。こうしてそのメニューが正確に示された冷蔵食

品を調理せよという指示は、作り方や、家電製品の選択を開かれたままにしておく。こうして電気カミソリの使用を録画したビデオは、国立試験研究機関LNEのエンジニアにより以下のようにコメントされている。

「この人は、すでに可動ブロックに最初の刃を設置しているのに、二つ目の刃を取り付けようとしているところです。あり得ない。使用方法に書いてあるのに。この人は刃に指をおきながら使用方法を読んでいるところです。事実、刃に指をおいているのに、ボタンを押そうとしているのです」。

別の実験では、通常、脚立の使用を必要とする、いくつかの高所での家事（整頓、カーテン取り外し、天井灯の付け替え）を実施する指令が与えられている。

エンジニア2「我々は彼らにマンションを訪問させました。大きな脚立が玄関に、もう一つの脚立が小部屋に、複数の脚の着いた足台が台所に、4本脚、もしくは5本脚の脚立がお風呂場にあります。テーブルの真上に置かれたランプを取り替えるために、彼らは、テーブルを移動させることなく、その上に立ち上がりました（しかしイスを取りのけた後にです）。お風呂場の上にある電灯を取り替えるために、彼らは、風呂桶に馬乗りにして脚立をおきました。これは不安定ですし危険でもあります。あってはならない使用法です」。

質問「どのようにしなければならなかったのでしょうか」。

エンジニア2「私には良い解決策はありません。そうした解決策があるかどうかわかりません」。

質問「毘のようなものでしょうか」。

エンジニア2「ええ、毘です。しかし、いずれにしても自分の家で行うべき現実の課業です。家の階段の階井をどう塗り直すのでしょうか。新しい脚立があった場合、これを汚さないように古い脚立を取り出して、ほぼ平衡にするために辞書を置いたりします」。

実験者は熟慮を働かせない「混乱」状況、緊急

状況、ストレスのかかる状況を作り出そうとする。

エンジニア2「我々は彼らを混乱させるために、状況整備します。私たちは彼らに電話します。（中略）脚立の上で、どのようにして彼らが上から即座に降りるかを知りたかったのです。彼らはすべてを手に抱えているのでしょうか、それとも手を支えに降りるのでしょうか、はたまた飛び降りるのでしょうか。私たちはマンションで起こること、調理や電話が鳴っていること、を必ずしもすべて再生産できるわけではありませんが、すこしばかり混乱させるような状況を想像することはできます」。

調査装置は事故のヒューリスティック、機能的から最も隔絶した点へと、いっそう純然と方向づけることができる。ドリル (perceuse) の使用における事故への反応を観察するためにある状況が組み立てられた。

エンジニア2「彼らが穴を開けて、彼らは目に見えない裏側でボルトを締めていました。すこし時間がたって、ボルトが動かなくなりました。強い反転があり、人々はかなりうまく反応しました。長い時間ドリルは其中で留まっていたましたが、しばしば人々はボルトを緩め逆回転させました。ドリルがブロックされると、ドリルが反転しはじめ、人々は停止しなければならないのです」。

ありとあらゆる行為と使用法につきものの固有なリスクを考慮して、シーンが悪い方向へと逸脱するリスクがあるときはいつでも、実験者が介入することができる³⁴⁾。

エンジニア2「脚立の事例では、私たちは、自動フックがない脚立に彼らが上らないようにと、私たちは介入しなければなりませんでした。脚立が折れ曲がるのを回避するために、『あなたにこれを渡すのを忘れていました』と道具を持って入っていったのですが、彼らは全く気づいていなかったのです」。

機能的事物の通常の使用と、使用法の間違いに由来する、もしくは器具の欠陥に由来する事故との間の決然たる対立よりもむしろ、こうし

た、かなり自由な使用法の観察は、モノとの可変的な調節の日常性を浮き彫りにさせる。事物の探索や、困難な状況下でのその使用法の調節、(事物の機能的定義と隔絶した)コミットを関与させる発明が、こうした調節をもたらすのである。

こうした調節を理解するための別の資源は、モノとのいざこざ、販売後のアフター・サービスに伝えられる事故や修理の確認から得られる³⁵⁾。しかしながらその報告は、当局への訴えや責任追及が引き起こす正当化のレジームへと縮減されない。

Ⅱ 親密化のダイナミズム

(1) 目印の操作と構成：モノの馴致

最も親密な調節へと直接、向かうよりもむしろ、その最も機能的な状態、発見されるべき新品の状態での事物へのアクセスを考慮することからはじめよう。その類似品と同一とされ、一般的な能力を付与されると、事物は、特異性のあらゆる概念と対立した同等なものに分類される。使用のダイナミズムがそれだけいっそう顕著になろう。

エンジニア2「我々は彼らに、発明されるべき製品、新製品、エキゾチックな製品を与えます。彼らは、これがどんなことができるのかはわかっていません。我々は彼らに言います。『一定期間私はあなたにこれを与えますので、あなたは私にそれが何をするものか、考えたことを私に言ってください』」。

不安のこの時点から、事物は、(ヒト・エージェントの意思の背後に隠されている)指示執行者の透明性を失う。使用法に記載された事物の機能性の一覧は事物を作動させるには十分ではない³⁶⁾。事物との不確実な直面と、それに伴う不安とによって、我々は、道具的把握と異なった、別のレジームへと開かれた扱い方のダイナミズムや様式を区別することができる³⁷⁾。

1) モノとの接点：慣行的な目印と親密な目印

新しい事物は厳密な機能性の期待にそわなければならない、こうした期待は、行動フォーマット（ここでは、この事物に自らの意欲を刻印するエージェントの意図の、手段としての実施として事物は構想されている）に統合されている。こうした関係において、事物とのやりとりは意欲のこうした刻印、もしくは伝達の道筋に集中し、（事物への自らの行為の効率的接合の中で使用者が同定する）接点へと集中する。指示や取っ手、レバー、ボタン、これらは付属説明書に一般的に記載された、慣行的な目印である。これらは、（最小限のコミュニケーションへと、つまりコード化された身振りによる指示の伝達へと縮減される）操作を導く。しかしながら、構想者によりしかるべく総覧されても、これらの入り口の構築は、使用者によるその実施を保証しない。その増殖は、接触への誘導の障害物となるからであったり（「至る所にボタンがついていて、ボタンを間違えるリスクがあるから、作動を複雑にさせる」SAV photoの技術士³⁸⁾、あるいは別の方法が、経験上、より良いアクセスを可能とさせるからである。こうした慣行的入り口の同定がないと、使用者は操作してみたり、いじくり回したり、ボタンを押してみたりして、暗中模索する。こうして自動式カメラの場合は、以下のようである。

SAV「シャッターを押す必要は一切ない機械です。こうした機械は自動式シャッター機能がついています。フィルムを取り付けるだけでいいのです。事実、人々は、こんなにも簡単なものはあり得ない、と考えています。彼らはいずれにしても、シャッターを押します。彼らは、どこかを押してみないと作動しないのではないかと考えます（こうして、きわめて壊れやすいシャッター膜を壊してしまいます）」³⁹⁾。

上述の例は環境への事物の感応性の点について無知な使用者を我々に示してくれる。しかし操作（厳密な意味での取っ手の探求である）は必ずしも不手際に終わるわけではない。それ

は、適切な、しばしば独特な目印の発見によって慣れた扱いをもたらす。パーソナライズされた目印のこうした設定——織物を手で触ってみる際の「触知」のプロの感覚に対応している——が、親密化の過程で獲得される「専門知」を特徴付けている。

入り口は使用者の身体との多くの接点である、という表象は、それがフィードバック（運動の修正において使用される基本的評価である）を考慮しないならば、不十分である。振る舞いをモノへと接合することに役立つ目印は、反応のダイナミズムの中で、事物がどのように「対応する」か、その仕方についての不安の中で構築される。したがって目印は、刺激をモノに与える接点には限定されない。すなわちコミットメントは、伝達状況を喚起せずにはおかenフィードバックを考慮する。指示を与える人が命令の執行について検討するような、人間関係の場合におけるように、使用者は自らの振る舞いの結果を判断するための記号を探求し、（彼が指示する）事物による活動の完遂の目印に注意を払うのである。

最も単純な例は、（その後のチェーンによるインスクリプションを延長させることを可能とさせる）フォーマットの中で「情報」を伝達するべく明示的に構想されたシグナルの場合である（Latour, 1989）。しかしながら操作は触知可能な目印にも（抵抗の変化及び機械の停止音のような）、もしくは（行為の完遂を知らせる、慣行的目印であるシャッター音のような）混合的な目印にも調節されている⁴⁰⁾。このような完遂の明示化の欠如は、事物の指示における食い違いの源泉である。それは以下のように、事故に引き続くメーカーへのクレーム文書が示しているように、である。

「あなた方は使用方法説明書きに、『お好きな位置にハンモックを置いてください』と書いてあります。ところがあなた方は、可能な位置の数については示していません。ベビーカーが新しい場合、中間的な勾配が可能なように思われます。ハンモックは設置されたままです。しか

し、突飛な行動でやんちゃな動きをすれば、二つの位置だけしか施錠されないことがわかります。水平的ハンモックか垂直的ハンモックかありません。したがって、あなたの方の説明書はベビーカーの使用の重要な側面について消費者を誤認させるものです」。

行為の完遂をシグナルする指標の欠如は、事物による指示執行への信頼の欠如の源泉であり、こうした信頼の欠如は場違いな、もしくは危険な介入を引き起こす。ぜんそく患者にとっての携帯用機器の系統進化がこうした問題を説明してくれる。最初の器具は、治療薬を放出しているときうるさい音がしたので、使用者は、換気音のおかげでどのくらいの量を使用しているかわかる。しかしこの音は、時をわきまえず、第三者にもこの投薬を通知する。音を消去することで、この機械はもはやその状態について何も示さなくなったが、このことは、多量服用するリスクを冒させることになった。この機器の新しいバージョンでは、吸着音の設定がこうした伝達の欠如を改善している。

したがって、視覚に限定されない感覚的コミットメントのおかげで、予想されているシグナルをかなり超えて、表現の豊富さが拡張される。注意深い使用者はモノを精査して、その状態を指し示すのに適切な特徴や兆候を引き出す。事物の構成はなお、使用者に向いていなければならないのである。機械的な接合から電子的な接合に移るとき、触知可能な、聴覚上の、またしばしば視覚的なコミットメントは、事物の表現をうまく把握できなくなる。この場合、その内在化された性格、自らへの閉じこもり、表現の豊かさの欠如、身体的接触の欠如が残念に思われることであろう。

SAV1「それは、触ってみればわかるような、お互いに全く異なった機能を持っていた、古典的なメカニクな機械とは全く違います。ひっくり返してみれば、何かが起こったものです。しかしそこでは、すべてが内部で起こるので、何も知ることができません。音もしなければ、何もないのです。最後になって、写真がう

まく撮れていないときになって初めてわかるのです」。

指示の実行を確認するように、また良好な執行を危うくさせるリスクのあるような操作者の追加的操作を回避するように、プログラムのダウンロード状況を図示するプログレス・バーのような、視覚的指標をもったソフトの中に、代替物が見いだされよう。しかし巧妙な設計は、マウスの場合におけるように、触知可能な筋肉動作を伴う目印を開発しようとするであろう。こうして、ある分析者は、筋肉の緊張からなされる運動療法的シークエンス（メニューの実行中に押され続けるボタン）と、行動のシークエンスとの間のパラレルを強調する。すなわち「シンタックス syntax の誤りを犯すことは不可能であり」、筋肉的緊張は、行為が終わっていないことを示す補助メモリーなのである⁴¹⁾。この作り手は、手動でのスタートを発展させることを強調し、とりわけ両手の使用によるそれを強調する。それはもちろんより長期の学習を伴うだろうが、別の道具に比べてその効果を示したのである。

2) モノそのものの扱いの方へ

モノの振る舞いのあり得る逸脱を懸念して、またそれを改善するために自らの行為を調節するべく、使用者は事故を予測しようとする。上述の説明が示すように、使用者の注意は単に整序された行為の完遂にだけ向けられているのではない。つまり彼はあり得る失敗、欠陥の前兆を待ち受けているのである。こうして軋み音は摩滅を表明し、もしくは温度上昇は不都合な摩擦を表している。こうした場合に言われるように、事物は「苦しんでいる」。この苦しみが環境に由来しようが、不都合さに、もしくは不正規な使用によろうと、そうなのである。正常ならざる状態の出現は生き物としてのエージェント（その機能不全は苦痛として翻訳される）の扱いと整合的である。こうした扱いは健全な状態では、ユーモアとともに、これらの情報を蓄積することを可能とさせる。そのうえ日常生活の特定の振る舞いは、かかる健全状態を評価

し、将来の欠陥を予測するための「テスト」の役目を果たす。それは困難な状況への事物の耐久性を測定することを可能とさせる振る舞いへと事物を服させることで、事物を試験することである。アドホックなテストがこれらの条件を特定することができない場合、この振る舞いはしばしば叩いてみること、もしくはショックを与えることにつながる。すなわちある部品が壊れかけているかどうかを見るために、この部品を押しつけてみるだろう。また組み立て工程の最後で、テレビをぼんとたたいてみることだろう⁴²⁾。

たんに、指示執行を示す情報「フィードバック」としてではなく、感情の表出として、容易に事物のコミットメントの目印は扱われるであろう。すなわちそこには（非合理的な、もしくは擬人的な、アニミズム的な投影としてみなされ得るような）態度のプラグマティックな基礎が見られるのである。Normanのように⁴³⁾、事物の「表現」について語ることで、モノの状態についての広範な指標を理解することができる。モノの状態は、コード化された情報として製造者により明示的に予想されていたシグナル（パイロットランプ、音声指示、メッセージなど）には縮減されない⁴⁴⁾。モノとのやりとりは失敗や成功の表現よりも、より複雑な表現によって豊富化されるのである。Normanが指摘するように、その外見上の良好な運転にもかかわらず、機器が「へとへとに疲れている」（この完遂がすでに、欠陥の修正の結果であるから）ことを自動パイロットランプが示してくれることは全くもって有益であろう。

調節を要求し、行為の進行に適したプログラム執行と関連づけられると、表現は、器官の苦しみを証言する苦勞としてだけでなく、社会的感情（状況の要請と存在物の能力との間の緊張により引き起こされる）として解釈することができる。この感情は、微調節を超えた緊張、また取るべき役割についての判断に由来する緊張を示している⁴⁵⁾。

（2）使用されるモノと使用者：分散された能力

使用への入り口によって我々は、モノとのやりとりの様式を同定するように導かれ、こうした様式の分析は、本質的特性の抽出の道具により、もしくは正常な使用に関連した機能によりもたらされる様式とは異なった別の把握様式に対して、堅固な基準を構築するために必要である。モノとの近しいやりとりの分析は、（プランや機能的人工物の状態によって把握されるフォーマットのみに留まることなく）環境や背景の場を強調する人間活動の探求に資する⁴⁶⁾。そのうえ、こうした分析は、——人的結合や、相互作用概念の広範な使用へのおおざっぱな言及に留まることなく——（信頼の家的な価値へと変容され、評価される）人やモノへのパーソナライズされた関係様式を解明するに違いない。

モノとの近接したやりとりを理解するために、我々は、親密性とはもっともかけ離れた状態、すなわち、正常な機能と結合した能力によって捉えられる事物の状態から出発して、そもそもの探索の段階から、パーソナライズされた扱いの兆候を明らかにしてきた。販売契約時点での近接性と、（事物の同一性を、販売時点を超えて延長させることを前提としている）アフターサービス保証とは、新品の事物の機能性への製品の完全な合致について顧客の不安をかき立て、——事物の使用が摩耗による順応へと向かうとしても——こうしたレジームを永續させるのに貢献する。いわゆる「技術的」事物のアプローチもまた、特性や機能によって捉えられる新品としての事物にしばしば限定される傾向にある。こうしたアプローチは古くなること、摩耗や修理のダイナミズムを考慮するには不適当である。使用が、（巧みな使い方を示す）パーソナライズされた目印を付与するのと同様に、事物との親密性は、その進化への適合をもたらし、（責任追及と訴訟での欠陥の責任帰属に対応しない）馴化をもたらす。実りのない一連の改修の後に、使用者は、際だった点として目立つ

ことをやめるような欠陥に「慣れる」し、この事物はもはや元の状態ではないことを認めるのである。使用していくうちに、使用者は、それにあわせて自らの行動を再調節するように彼を促す、モノの脱線を受け容れるのである。

これらの扱い方の間での対照は、アマチュアとプロとの間での対立においてとりわけ顕著であり、それは、特別仕様の同一の事物が、この二つのタイプの使用者により採用されるときである。「高級」カメラのアフターサービスの観察（これらの二つのタイプの使用者を対象とする）は、新品の欠陥についての買い手の不安と、親密な使用の信頼（パーソナライズされた関係を構成している種別的な際だった点のネットワークの構築に基づいている）との間での対照的な、二つの扱いの間でのコントラストを浮き彫りにさせるのである⁴⁷⁾。

1) アマチュアの不安に満ちた使用と、プロの鷹揚な取り扱い

プロは摩耗になっており、むしろせつせと摩耗させるのに対し、逆にアマチュアは新品同様の状態に近い完全さでモノを維持しようとする。そこでは特徴は機能的格付けと混同されている。表面上のちょっとしたひっかき傷でさえ、アマチュアに対しては、損耗した特徴を懸念させ、その機能を果たすことへの事物の能力についての疑いを投げかけるのである。些細なことにうるさい、つまらないことにけちをつける、こうしたアマチュアの顧客は、アフターサービス受付に対して、証明装置をしばしば利用して、新品状態の欠損を示そうとする。ポケットランプを使ってひっかき傷を指さしてみたり、写真の品質には影響を与えないのに、可動式ミラーに付着している汚れを指さす。最終的に、修理は、彼によっては支払われないことが取り決められているとしても、この顧客は、新しい機械の購入に際して、彼がすでに持っていた機械のミラーの交換を交渉するのである。きわめて慎重に保護されてきた事物の、その保護の中に不安が表明されている。

高級カメラの技術者SAV2「アマチュア——彼はカメラを傷つけることを恐れている——は、シャモア皮の切れ端で包装された機械を、カウンターで用心深く提示するでしょう」。「別のアマチュア顧客は大きなスーツケースを持ってきます。彼はスーツケースを開きます。そのなかには手術用の緑のシーツにくるまれたカメラがあるのです。というのもこうした顧客はしばしば医者なのです。彼は荷ほどきし、次いで革のナップザックが現れます。彼はこれを開き、きわめて慎重にカメラを取り出すのです」。

技術者によれば、プロは、一見しただけでそれとわかる。というのも彼は、「アマチュアほどにはその機械に対してマニアックではなく」、「おどおどしておらず」、「鷹揚に扱う」。自分のモノを不適切に扱ってしまったのではないかというアマチュアの不安に対立するのが、（使用マニュアルの説明書に示されているような通常の使用に照らして）不適切な行為によって機械にショックを与えることに躊躇しないプロの鷹揚さなのである。緊急の場合になされる振る舞いを概観するに、写真家は「機械をぞんざいに扱い」、「機械を苦しめる」。つまり「アシスタントにもられるよりも、より頻繁に、どこでもいい店舗に持ち込まれる」。月面に到着したアメリカの宇宙飛行士たちは、事物を手渡しすることができなかったので、「月着陸船のエスカレーターで機材を移動」させなければならなかったに違いない。壊れやすいモノとして保護されるのではなく、また容赦のない使用を展望して（このプロは、フラッシュを「暖める」ために、毎朝、おびただしいほど、何も斟酌せずに、自分のカメラをいじくり回す）、事物は、使用者との身体的直面において身体を圧倒してしまうまでに、以下のように活発なその抵抗力を見せつけるのである。

SAV「機械や歯車は鋼鉄製です。いくつかの部品は大きすぎたり、固すぎる。もしあなたがその中に指を挟まれれば、指を切ってしまいます。指を引き抜くことができないので、指を中に入れたまま、歯車を分解しなければなりません」

Oct. 2018

親密性のレジーム

ん。モーターの力が弱いので、フィルムを引っ張り出すことさえできなかったような機械が知られていたのです。すこし寒いときなど、フィルムは硬化し、モーターがもはや動くことができなかったのです」。

上述の耐久度の証拠はここではとりわけ見事である。

SAV3「コック、外皮カバーが唯一の部品です。私は、空のカバーの上に両足をそろえて、その上に乗ります。それは動きません。あなたは、どんな小箱でもこうできます。一部はドイツで作られているXでも、あなたは危険を免れます。」

アマチュア向けの広告にあった、アフターサービスの技術者の言葉そのものによれば、モノはロールスロイスから「トラクター」に変容した。しかし耐久性は、すべての試験をパスするわけではなく、予想されざるエージェントたちは、全く思いもよらないような場所で、モノを攻撃し、弱点を発見することができる。

SAVの責任者「外国のアフターサービス責任者たちとの会合が定期的にあります。我々が今まで経験したことのなかったような問題を、何人かは定期的に持ち込みます。サウジアラビアでは、彼らは安定した電力の問題があります。インドネシアでは湿度の問題があります。絶縁ラバーは耐えられません。それは防湿であることをやめ、菌が繁殖します」。

トラクターの強力さが、菌（熱帯気候のおかげで、ラバーの中に浸食する）により破壊される⁴⁸⁾。「コンテキスト」と呼ばれるであろうもの——それは、使用者を含む親密なパートナーたちを含むことができる——は、モノから切り離すことができない。ところが、固有な能力をモノに付与するためには、こうした切り離しが不可欠なのである。

2) 自分のマシンをブリコラージュする

プロは「自分の機械をブリコラージュする」のに躊躇しない。Linhartは、工業作業現場の中でさえ、労働道具の調節のみごとを一覧を我々

に提供してくれる。修理工場の「あまり杓子定規でない、ブリコラージュされた作業台」、「なじんだポンコツ」、「鉄くずの塊や棒、雑多な支え、即興で改良された万力などからなる、不安をかき立てる不安定性を帯びた、得体の知れない機械類」、しかしながら、労働者は「躊躇することなくこの中に入り込んでいる」⁴⁹⁾。調節能力は、「その作業台をいじくり回し、ナットを移動させ、くさびを調整する」のに費やされた時間の中にある。しかしこうした調節は、ブリコラージュする人や、職人、修理工だけのものではない。実験室では、熟練したプロであったら、マシンへのアクセスを導くために構想された機能を、「飾り物」としてとらえたことであろう。つまり電子顕微鏡に施されている「飾り物」は見習いには時間の節約をもたらすであろうが、専門家にはこの時間の節約の利点を失わせるし、機能不全の追加的源泉となり、「故障を引き起こす」⁵⁰⁾。測定道具のポンプからヘリウム流出を回避するために、継ぎ目には油をささなければならぬが、微量の油のポンプへの浸入は、目印となるべきであった最初の測定からのずれをもたらす。これらの調節から以下のような結論が得られる。つまり全体の能力は、モノや、なじんだ使用者に分散されており、より広範に、ヒューマンとノン・ヒューマンを（杓子定規でない目印によって）徐々に接合する装置に分散されている。摩耗がしばしば使用に依存するように、摩耗への調節はヒト・エージェントとそのモノとの間での相互調節に貢献する。こうした目印を収集するための表象フォーマットは存在しない。つまり、ひとつの全体モデルないし理論の中に目印を統合することで、また目印に一般的情報の価値を与えることで、これらの目印を関連づけるための表象フォーマットは存在しない。だからこそ観察者はこれらの目印の接合を把握するのに当惑し、熟練した人でさえ、目印を明示化するのに困難を感じるのである⁵¹⁾。

3) 失望をめぐる探索の継続

親密性のレジームは積極的発見の最初の契機に限定されず、失望を契機として継続する。不具合は使用者に対して事物の、名目上の、機能上の全体的同定の閾値の下にまで至るように促す。こうした親密化のダイナミズムを示すためにしばしば使用される「学習」というタームは、もしそれが標準的機能への同化を示唆するならミスリーディングである。使用の道すじは、(使用の機能的規則、処方において明示化されている)目印とは一致しない指標の付与により印をつけられる。使用によって我々は、特性の束としてとらえられる事物の閾値を超えて、以下のような目印点に至るように促す。すなわちこの目印点は、パーソナライズされた、したがって使用者に応じて異なっているだけでなく、(事物にそのアイデンティティを付与する全体性に照らして)部分的でもあるのである。

故障の拡散を制限するための、もしくはローカルな修正を試みるための努力のなかで、不具合から思いがけない受動的な発見が生じる。判断の一般の形態に挿入され、モノや使用者のあれこれの器官へと失敗を帰させることを可能とさせるような明示的診断がない場合、全体の様々な要素を微調整することで、修繕の試みがなされ、新しい均衡に到達する。いじくり回すことで、身体的な再調節が、モノとの接触において、新しい目印を同定するに至る。こうした手探りによる操作の要請が見られるのは、逆に、作られた事物が操作を妨害するときなのである。こうした微調整操作ができないために、事物は、「機能している」v.s.「機能していない」という選択肢にとらえられ、けっきょく、機能という概念にその一貫性を与えるのである。

SAV1「もはやちょっとした失敗はないのです。わずかなやっかいごとでも起きると、機械はアウトです。以前には、うまく作動しないときには、いじくり回すことで再開させることができたのです。今では電池で作動しているので、何かが動かなくなると、なすすべがないのです。にっちもさっちもいかないのです。その

うえフィルムを取り出すのがやっかいです。ボビンを巻くこともできないのです。安全装置がありますからね。その場合、すべてを壊すリスクがあります。以前は、ハンドルがあったので巻き取ることができたけど、もうハンドルもないのです。過度に単純化しすぎました」。

不安に満ちた特異性、事故の際に現れる際だった点、これらは通常の使用において目印となる。このように事故が頻繁に起こることから生じるなじみが、微妙な操作(事物と、ヒトの介入へのその反応を示す目印の増加が可能とさせる)において顕著に表れる。ここにおいては、なじみとは、ある技能や仕事、技術をマスターすることなのである。エージェントに固有な目印点のネットワークが、彼自身による親密空間の把握をなしている⁵²⁾。

これまで我々が習慣やルーティンといったタームを回避してきたのは、特定の環境へのモノのなじみづきあいにより形成される目印ネットワークの構築と修正のダイナミズムを、こうしたタームが考慮させてくれないからである。探求のダイナミズムは主体と環境とに応じて、不平等に維持されたままである。新しい未知の事物の発見の段階で、(機能モデルがないために)不安な、また不平等に実り豊かな探索が、使用空間で即座に中断することもある。目印全体が、以下のような地帯を限定する。すなわちその地帯を超えては、使用者は自分がリスクを冒すと考え、また自分では解釈できないのでは、という不具合への懸念によって自信をなくすと考え、そのような地帯である。リスクに満ちた探索を続行することは、ある使用者カテゴリーを特徴付けている。こうした使用者は習慣に閉じ込められておらず、ルーティン化された使用では、事物の機能的能力に比して狭すぎると考えるのである。

Ⅲ 親密性空間の拡張

これまで我々がヒトとモノとの間の親密性のレジームのダイナミズムに注目してきたのは、

Oct. 2018

親密性のレジーム

意図を持ったエージェントと、その行為の道具との間での対面という、（行為フォーマットに固有な）自明性を壊すためなのであった。しかしながら、こうしたダイナミズムは二つのエージェントの対に閉じこもってはいないことが明らかである。すなわちローカルな目印点を中心としたコネクションが、様々な形のネットワークで紡がれ、これが分散された能力を支えている。上述の労働現場や実験室、作業場は、こうした拡張を前提としている。自らのモノへの使用者の特異な対話を超えて、こうした目印点は錯綜した調節ネットワークの中で維持される。計画されていた課題の執行に限定された短期でのダイナミズムにおいてさえ、労働空間の準備は⁵³⁾、すでにしてこの種の整備であり、事物の機能的把握による整理としての空間配置と対立している⁵⁴⁾。場所の準備は破壊であり、モノの間での結合、またモノとの結合（特異な使用への関係によって種別化されており、その機能一般においてとらえられてはいない）のネットワークを表明するために空間を開拓する破壊なのである。

組織へのこうした空間の拡張を考慮する前に、より根本的な姿、自らの周囲環境との種別的結合のネットワークへと「分散されたパーソナリティ」を検討しよう。より一貫したあらゆる組織の前に、長期での近接性の関係に取り組む二つのパーソンの親密化にしてからが、すでにより根本的な二つのネットワーク＝パーソナリティの間でのインターコネクションなのである。

（１）みずからの周囲環境に分散されたパーソン

モノの「パーソナライゼーション」が興味深い操作であるのは、それが行為のコントロールにおける実践的要請を、パーソンの維持の条件へと結合しているからである。それはたんにモノへのパーソンの分散であるだけでなく、逆に、親密性の結合からパーソナリティを構築することなのである。自らの周囲環境への分散

は、人間存在に対して一貫性を与え、我々は人間存在を、パーソナリティの主人として、固有なものとするのが通例である。パーソナライズされたモノは、これを所有しているパーソンから切断されず、その表面を拡張させ、その維持を保証する。

パーソナリティという概念は長期的展望を必要とする。ヒトとモノとの調節がパーソンの維持を保証するように貢献するのは、時間性においてなのである（一瞬の活動の時間性ではない）⁵⁵⁾。特別な活動へと閉じたアレンジメントを超えて、モノの性向とその使用へのなじみが、親密な環境の掌握に資する。親密性のレジームによるこうしたアプローチが人間存在の扱いにおいて長期での時間性を展望することを可能とさせる（個人的アイデンティティの厳格な一貫性を受け入れずに）。

パーソナリティの分散された特徴は記憶の観点から表明することができる。人間身体の身振りを延長させる道具体系という考え方は、すでにLeroi-Gourhanに対して、「外部記憶」（Normanによって取り入れられ、発展された）を示唆していた⁵⁶⁾。しかしシステム論的關係を検討し、「情報ネットワーク」を指摘するだけでは十分ではない。親密性のレジームについて我々が見てきたことは、一般的な「情報」フォーマットの中にはない目印の場を強調する。近接性の関係のこうした局地性こそが全体のダイナミズムの起源にある。パーソナライズされたモノと、そのコミットメントの親密な目印とが事物の一般性を解体し、パーソナリティのダイナミズムを確立することを可能とさせる。

この親密性のレジームは、主体を支えるルーティンへと凝固することができる（ルーティンが主体の意思に対応するというよりも）。習慣が根を下ろし、モノ自身が活性化するのに応じて（モノが手段として提供されるよりも）、主体は曖昧になる⁵⁷⁾。

（２）親密な空間から公共空間へ

我々の検討から、公的なことと私的なことと

の対立についていくつかの教訓を引き出すことができる。異なった行為領域の間での差異、もしくは、集合体と個人との間での差異というよりもむしろ、こうした区別は異なったプラグマティックなレジームの間での緊張を示しているのである。組織の中でそれははっきりと見られる。親密性のレジームは熟練した使用を支えているので、このレジームはプロの仕事場でふんだんに活用されている。しかしながらそれは公共の扱いの要請にとって障害となる。こうした要請はとりわけ明示化と公的判断、正当化に服するコーディネーションのダイナミズムにより表明されるからである。

パーソナルな親密性と公的な正当化との間で、組織は、個人的行為の構成とは異なった形態（私的閉鎖と公的開放の両立を目指す）をとる。HeathとLuffは、自分自身の行為を行いつつ、親しい別のアクターたちにより実施される行為の周辺のモニタリングをすることの重要性を示している⁵⁸⁾。このモニタリングは、これらの別の人々と、共通の行為にコミットすることを要請しない⁵⁹⁾。彼らが「真剣に考えている」ときやある振る舞いを強調するときに、彼らによって共通活動へと促される⁶⁰⁾。こうした協力形態が要請するのは、活動とその道具が、共通の目印にしたがって「解説可能である」ことである。そうでなければ共通の親密さがより強く要請されることになる。

1) 分散された能力、付与された能力

組織とともに、（規則を支え、共有知を構成する）共通の目印を形成する必要性が登場する。ところが上述のように、親密性のレジームは目印の共有と、共通表象の構築をたどらない。そのうえ、親密性のレジームにおける進化がローカルな目印によって徐々になされるのにたいして、工業的コーディネーションのダイナミズムは一般的形態での判断による評価を通じて展開するのである。（責任帰属に固有な切断（デタッチメント）を許容しない）分散されたダイナミズムに対立するのが、責任帰属訴訟に固有な付

与 attribution の運動なのである。別のところで我々は、こうしたコーディネーション形態が前提する配置 agencement を、とりわけ（装置の様々な要素への正常な能力の付与に基づく）「因数分解」を強調した⁶¹⁾。判断の分析学におあつらえ向きなこうした配置は、ヒトとモノとの扱い（その切断とその現状維持に貢献する）により支えられている。切断すること（同時に、語義そのものの意味での清掃すること）は、付与と責任帰属のダイナミズムから生じる⁶²⁾。

上述のテストを導く安全性準拠、もしくは労働分野における規律が必然的に配置を付与のレジームへと近づけるのに対して、使用者もしくはプロの振る舞いの快適さは配置を親密性のレジームへと近づける。テストが快適さへと向けられているのか、それとも安全性へと向けられているかに応じて、またテストが使用者への順応を強調するのか、それとも責任付与の可能性に関わるのかに依拠して、テストは異なる。（使用者のイニシアチブや創造性にほとんど配慮せず、ましてや驚嘆せず、むしろ「悪い取り扱い」を告発しがちな）観察者においては、安全性の目標は批判的態度を起こさせる。慣れてはいるが、あまり注意深くないブリコラージュについては以下のように言われる。「火花が散ったって、彼は全く驚かない。彼は作業着も着ていない。しかし、よいブリコラージュする人、良いブリコラージュと思われる人が雇われている。コードが何処に通っているかわかるでしょう（のこぎりの回転刃のすぐそばで）」。

熟練した振る舞いは、正常に事物に付与された能力や機能の掌握を超えているので、こうした振る舞いは人間エージェントの秀逸さの特徴として公的に評価されることができる。通常のその機能性に含まれていないことを事物にさせることは、見事な能力を使用者に帰するように促し、分散された能力であったことを自分のものとして（自分の勘定で）取得するように促すのである。名人芸はまた、（事物がその特性を固守し、使用者が機能的な事物により捉えられているような）状況と対立する⁶³⁾。

Oct. 2018

親密性のレジーム

2) パーソナルな効果から信頼の保証まで
親密性のレジームの変容から生じることで、親密ならざる人々への拡張から生じることで、贈与は、市場交換によるよりも、親密性のレジームに準拠することで、いっそう明快にされる。競争的コーディネーションがうまく切断された財の市場、したがって主体と事物との根本的な切断を必要とするのに対して⁶⁴⁾、贈与と反対贈与との調節は強いアタッチメントを示している。そこではモノがこうした帰還力（モースにより明らかにされた）を持っているので、贈与は、この親密性のレジームに基づいた根本的な政治的構築物として考えることができる。時として価値のないものであっても、贈与が活性化されるということは、起源としての親密空間（人とモノとが家の中でのように、家族の中で結合されている）へのその根付きに由来する。Res（ローマ法の）は「取引の単純で受動的な事物」となったが、元来は、そのようなものではあり得ない。というのも、常に所有者や家族の印、マークを刻印されているからである⁶⁵⁾。

モースが検討した「社会的結合」のこうした形態と並んで、モノのパーソナライゼーション（我々はその運動を検討した）は、様々な正当化を支える現代政治マトリックスと両立可能な、一般化可能な判断形態の基礎として役立つこともできるのである。我々が「家内的」⁶⁶⁾と呼んだ価値（大きさ）は、親密性の関係に依拠する関係を、一般的コーディネーション形態によって統治するための精緻化である⁶⁷⁾。それは人間共同体への判断の拡張を前提し、親密性の空間を欠いたプラグマティックな要請を到来させる。それは人とその周囲環境との関係を家内的格付け（親密ならざる存在物との行為のコーディネーションを可能とさせる）へと変容させることである。パーソナライズされた事物はもはや単に共通活動にコミットするのではなく⁶⁸⁾、信頼の観点から格付けされる判断を支えるのである。

（以上、「上巻」。第Ⅳ章エピソード及び原注は「下巻」にまとめて掲載する）

（2018年7月12日掲載決定）